

この溺愛は極上の罨

目次

この溺愛は極上の罠

5

策士、策に溺れる

271

この溺愛は極上の罠

ずつしりと重いボストンバッグを肩にかけて、マンシヨンの階段を上^{のぼ}っていく。
築二十九年の団地型マンション。その三階にある我が家の玄関前によく到着し、鍵を開けて中に入ってから、ボストンバッグをどんつと上がり櫃^{かまど}に下ろした。中身はほぼ野菜。別名、田舎^{いなか}の愛である。

ここが一番家の中で寒いから、しばらく置いておいても問題はないだろう。

誰もいない家の中はしんと静まり返っていて、室温も外とさほど変わらない。部屋に入り、さっそくファンヒーターのスイッチを入れた。

機械音と共に出てきた熱風にほっと一息つく。座り込みたいのはやまやまだけど、もうひと頑張りにして隣の和室に入り、隅っこにある小さなお仏壇を開けた。その前の座布団に正座して手を合わせる。

「ただいま帰りました。……って、今ごろ向こうでお父さんと仲よくやってるかな？」

仏壇の前に置いたスナップ写真に収まった、満面の笑みのお母さんとぼちつと目が合う。まるで『もちろんよ!』と言っているような気がして、私は小さく笑った。

私、堤真希^{つみまき}は都内のアパレルショップで働く販売員である。メイク映え^{えま}はするものの素は地味な顔で、身長は百六十センチ。職業上太らないようにはしているけれど、ここ最近は忙しさやらないやらで、痩せているというよりやつれている感がある。

ショップのスタッフには仕事に生きていると言われていて、実際、彼氏はいない。仕事柄休みが不定期で、副店長という役職上残業も多いため、彼氏を作る暇があるなら寝ていたい、というのが正直なところだ。二十五歳にしては枯れている自覚はある。

そんな忙しい中、私は長期休暇をもぎ取り、子供の頃に亡くなった父の田舎^{いなか}へと行ってきた。それにはもちろん理由がある。

半年前に母を病^{やま}で亡くしてから始まった一人暮らしにも、少しずつ慣れてきた。最近ようやく気持ちの踏ん切りがついた私は、父の眠るお墓に母の納骨を済ませてきたのだ。そして、夜行バスでたった今戻ってきたところである。

ぎりぎりまで叔母^{おば}さんに引き留められてしまったので、休みはもう今日しかない。

帰ってきたばかりだけど、ボストンバッグの中に入っている分も含めて洗濯物が溜まっている。

それにいまだ手つかずのお母さんの遺品も、できれば納骨を済ませた勢いに乗って整理してしまいたい。

「よしやるか!」

わざと声に出して気合を入れる。だけどその前にきちんとお仏壇に手を合わせようと蝋燭^{ろうそく}に火を

灯し、お線香を立てたその時——インターホンの音が静かな部屋に響いた。
何だろう？

宅配便の受け取り予定はない。時々、お母さんと仲がよかった近所の人がお裾分けを持ってきてくれることはあるけれど、大体は夜だ。

……勧誘とかセールスだったら嫌だな。

せっかく絞り出したやる気に水を差された気分です。汐々と立ち上がり、キッチンの壁に備えつけられているインターホンの受話器を耳に当てた。残念ながら古いマンションなので、カメラ機能はないのだ。

『突然申し訳ありません。乃恵さんの古い知り合いなのですが、亡くなったと伺って訪問いたしました。お線香をあげさせていただきませんか？』

顔を確認できないのが惜しいくらい、爽やかな男の人の声だった。朝の情報番組に出演しているアナウンサーみたいだ。

「えーっと」

返事に困って言い淀む。

乃恵というのは母の名前だ。だけど母の知り合いにしては声が若すぎる。

……うーん、母の職場だったホームクリーニングのお得意様かな？

母が亡くなった直後は他のスタッフに聞いたり、年賀状の住所を頼りにしたりして訪ねてきてくれる人もいたので、来客自体はそれほど不思議じゃない。

でも、そういうお客さんはみんな女の人だった。だからそれほど抵抗もなく家に上がってもらっていたのだけだ。

……とりえずチェーンをかけたまま、どんな人か確かめよう。

見るからにヤバそうな人だったら、申し訳ないけれど誰か一緒にいる時にでも出直してもらおう。幸い私はコートを着たままだ。今から出かけるふりをして断れば不自然じゃないだろう。

ちなみにうちの扉のドアスコープは、何が原因なのか分からないけれど覗き込んでも真っ黒なのだ。一人暮らしになってしまったし、ここからは直すべきだよね……

鍵を外し、チェーンが届く範囲までそっと扉を開いて外をうかがう。すると、その隙間を覗き込むみたいに少しだけ首を傾けた男の人と目が合った。

うわ……

ポカンと口を開けたまま、目の前の男の人の顔をまじまじと観察してしまう。

モデルのように整った彫りの深い甘い顔立ちに、細いんだけど適度に鍛えていることが分かる身体。それを包む見るからに仕立ての良さそうなスーツには皺一つなく、塗装の禿げた安っぽい鉄の扉との違和感が凄かった。

屈み込んだ体勢で身長百六十ぴつたりの私と目が合うということは、身長も相当高いはずだ。

お母さん！ なにかイケメンが訪ねてきたんですけどー！

思わず心の中で母に助けを求める。

一体どこでこんなイケメンと知り合う機会があったというのか。母の交遊関係が謎すぎる……！

「こんにちは。乃惠さんの娘さんの真希さん……だよな？」

そんな美形が扉の隙間でニッコリと笑う。受話器越しの礼儀正しい挨拶とは随分違うフレンドリーさで名前を呼ばれて、一瞬知り合いかと首を捻ったものの……いやナイ！　こんなイケメンとどこかで会っていたら、問答無用で脳みそに刻まれるはず。

「不審者じゃないからね？　身元確認のためにどうぞ」

いや、不審者にしては顔が上等すぎるから！

そう心の中で突っ込みつつも、すっかりイケメンのペースに巻き込まれて、隙間から差し出された名刺を受け取ってしまった。名刺はお洒落なデザインで、しかも顔写真つきだ。

「ハフノン・マネージメント……え、常務……!?」

役職の高さに思わず驚く。イケメンさんは失礼すぎる私の反応を気にした様子もなく、笑みを深めてその続きを引き取った。

「相良大貴と申します」

名前まで格好良い……そんな明後日なことを考えていると、相良さんが再び口を開いた。

「乃惠さんには子供の時、とてもお世話になったんだ。……そうだ。パンケーキの味は変わってなかったのかな？　他の料理も美味しかったけど、あの味だけは未だに忘れられない」

突然出てきた『パンケーキ』なんていう可愛らしい単語に戸惑ったけれど、恐らく母の知り合いだということを証明するために言ったのだろう。彼が懐かしむみたいに呟いた『パンケーキ』は、確かにお母さんの得意料理の一つだった。その辺のお店が出すものよりふわふわで美味しく、私

も子供の頃は、よくせがんだものだ。

お母さんの仕事は基本的にホームクリーニングだったので、料理はよほど仲のよい派遣先でしか振る舞ったことがないと言っていたような……

戸惑ってすぐに返事ができなかった私に、相良さんは一瞬俯いて、すぐに顔を上げる。そしてさきゅつと眉尻を下げて、困ったように首を傾げた。

「……お線香だけでもあげさせてもらえない、かな？」

さつきまでとは違う、遠慮がちな声だ。その様子に気まずさというか、申し訳ない気持ち湧いてきて、私は数秒間悩み——結局、我が家へと招き入れることにした。

何かしらの犯罪目的だったとしたら顔写真入りの名刺なんて渡さないだろうし、パンケーキなんて内輪話、出てこないはず。

それに何より、手料理を振る舞うほど仲がよかったお家の息子さんだ。しかもイケメン……面食いだっただお母さんだから、お線香をあげてもらったら喜ぶに違いない。

相良さんにお客様用のスリッパを勧め、仏壇がある和室へ案内した。

途中で某高級果物店のロゴシールが貼られた盛籠を渡されて、その豪華さにフリーズしかけたものの、和室に辿り着く。

そのまま果物籠を供えて、お線香の箱を分かりやすい場所に出しておいた。

相良さんが仏壇の前に座るのを確認してから、私はお茶を淹れようと、そっと部屋を出てキッチンに入る。

お茶かコーヒーか紅茶……何がいいかな。

いっそ本人に聞いてしまおうと、コーヒー豆の袋を手にして和室を覗き込んだ。

先程と変わらず仏壇の前に座っている相良さんは、もう手を合わせてはおらず、じつと母のスマホ写真を見つめている。俯うつむいているせいでその表情は見えないけれど、なんとなく雰囲気が重いような気がして、声をかけるタイミングを逃した。

……ホント、どんな知り合いなんだろう……

ふつと相良さんが視線を動かし、静かに私を見る。決してやましいことはない……けれど、何故か私の方が焦あせってしまふ。思わず身体を後ろに引いた途端、相良さんはさつき挨拶あいさつしてくれた時と同じ、爽さわやかな微笑みを浮かべた。

「あの、お茶とコーヒーと紅茶。どれがいいですか」

和やわらいだ空気にほつとし、手にしていたコーヒー豆をかかえて本来の目的を果たす。

相良さんはすつと立ち上がると、私の方へ歩み寄ってきた。

案内していた時は後ろにいたから見ていなかったけれど、やっぱり身長が高い。天井までの距離が明らかに近くて、鴨居かもいに頭をぶつけないか心配になる。

「じゃあコーヒーを貰えるかな？」

思ったよりも近い距離で止まった彼から漂たふよってくる、爽さわやかだけど甘い香水の香りに、ちよつとどきりとする。

「あ、はー」

話す時に少し顔を傾けるのは癖なのだろうか。こうやって目を合わせようとするのは、身長の高い彼なりの優しさなのかもしれない。

あ、瞳の色が薄い。

玄関では逆光だったから気づかなかったけれど、自分とは明らかに違う、黄色がかかった薄茶色の瞳に驚く。……ハーフとかクォーターとかなのかな？ 彫りも深いけれど、外国人！ という感じがしないのは、私とさほど変わらない髪色のおかげだろう。とはいえ地味というわけではなくて、彼の場合はそれが親しみやすさとなっている。

思わず観察していたら相良さんの目がやんわりと細まって、唇の端が上がる。きつと見られることに慣れているのだろう。そんな笑い方だった。

この人モテるだろうな。ハーフとかだとしたら最強モテ要素が追加されて、逆に大変そう。

「じゃあ、あの……ダイニングテーブルで座って待っていてくださいね」

食卓はお客様に勧める場所ではないけれど、ソファなんてものは置いていないし、あとは小さな炬燵こたつしかない。それだとストラックスが皺しわになりそうだし、何より近すぎて私が挙動不審になってしまう。

手早くコーヒーを淹いれて、少し緊張しながら相良さんの前に置く。自分のコーヒーも置き、向かい側に腰を下ろした。

「乃恵さんが亡くなったのを知ったのは、つい最近のことなんだ。……急に来てごめんね」

なんとなく気まずい空気の中、先に口を開いたのは相良さんだった。

「あ、いえ。こちらこそお知らせできなくてすみません」

「ううん。僕も全然連絡を取ってなかったから。えっと真希さん、……ふふ、なんかしつくりこないな。僕、子供の頃は君のことを真希ちゃんって呼んでたんだよ」

思いがけない言葉に驚いて声を上げる。

「私と会ったことがあるんですか？」

え？ 本当に？ いつ？

「覚えていなくて当たり前だから安心して。真希ちゃんが二歳くらいの頃だったかな。当時真希ちゃんのお父さんも相良システム——うちの実家がやっている会社なんだけど、そこで技師として働いていてね。乃恵さんもその関係で、うちのお手伝いさんとして三年働いていたんだ。本当に時々だったけれど、真希ちゃんを連れてきてくれて、一緒に遊んだこともあるよ」

「二歳！ え、じゃあ相良さんのお家ってホームクリーニングの派遣先じゃないんですか？」

すっかりそうだと思いついでいたのでびつくりした。それに私が二歳なら二十三年前だ。覚えてるわけがない。

でも、考えてみれば確かにお母さんがホームクリーニング会社に勤め始めたのはお父さんが亡くなったからだだったから、時期的には合わない。

相良さんは頷いて、昔を思い出すように目を細めた。

「僕もまだ小さかったし、詳しくは分からないんだ。でも、派遣で来ていたわけじゃないと思うよ。今も実家では何人が働いてもらっているけど、住み込みでも通いでも派遣会社を通さずに直接雇用

契約を結んでるから」

住み込みの家政婦さんって……

あまりの世界の違いに言葉を失う。しかも何人もいるって、どこの貴族？

目の前の人物はそんなお家のお坊ちやま。……いや、そのわりには気安いけれど。

「イギリスから父に嫁いでできた母も、明るく朗らかな乃恵さんのことをとても信頼してたんだ。母は身体が弱くてね、それを支えて僕の面倒を見てくれたのが、乃恵さんなんだよ」

「へえ……」

確かにそうやって面倒を見てもらったなら、記憶に残るかもしれない。家政婦っていうよりは乳母とかシッターっていう感じだったのかな？

そう考えて首を捻る。

でも、それって逆の立場だって同じことが言えない？

お母さんだったら大きなお屋敷に勤めていたことも含めて、『若い頃、天使みたいな可愛い子のお世話をしていたのよ』とかって話してくれそう。天使みたいな、っていうのは私の想像だけ……相良さんの顔立ちなら子供の頃もさぞ可愛かっただろうから。

……今度、お母さんと仲がよかった叔母さんに聞いてみようかな。

三年も勤めていたのなら、話くらい聞いているかもしれない。

「乃恵さんはあの頃の僕にとって……第二の母同然の存在だったんだ。だから、いつか会ってお礼をしたいと思っていたんだけど、まさか亡くなっていたなんて、本当に驚いた」

相良さんは笑みを浮かべながらも、懐かしむような悼むような表情で語った。

そして俯うつむいてしまい、表情が見えなくなる。

「あの、相良さん」

私は少し考えてから、相良さんの名前を呼んだ。顔を上げた彼の目元はほんのり赤くて、ちよつとだけ幼く見えた。

「――母は亡くなる直前も笑顔で『幸せだった』って言っていました」

これは自分の死を悲しんで泣いてくれる人がいたら伝えてね、と母に言われていた言葉だ。

お母さんは声すら出せない痛みに耐え、笑って亡くなった。あの言葉がなかったら、私は今もずっと『ああすればよかった、こうしておけばよかった』なんて後悔し続けていたかもしれない。

この言葉は本当に魔法みたいに作用する。それを聞いたみんながみんな、『乃恵さんらしい』と笑ってくれるから。

……彼にも、魔法の言葉は効いてくれるだろうか。

テーブルに置いていた拳こぶしを握り締めて、再び俯うつむいてしまった相良さんの表情をうかがうことができないまま、長い沈黙が続いた。

私も黙ったまま、手つかずだったコーヒーにポジションを落として口をつけた。

ちよつと温ぬるくなつてしまったけれど、お客様用のカップで飲んでいるおかげか、いつもより美味おいしく感じる。それともイケメンと一緒にだからかな……

カップの縁ふちの向こうで、相良さんはまだ俯うつむいている。

……泣いてくれているのかな？

泣くほど母を悼いたんでくれる人がいる、という事実じじつに貫つらい泣きしそうで困るけれど、娘としては誇らしくもあつた。

「コーヒー、冷めたので淹ひれ直してきますね」

相良さんが落ち着くまで席を外そう。

いくら母親のように慕したっていた人の娘でも、いい大人が泣き顔なんて見られたくはないだろう。そう考えて立ち上がり、手つかずのカップを回収するべくそつと手を伸ばした。――が。

急にその手を掴まれ驚く。ぱつと見下ろした相良さんの顔には、表情らしい表情は浮かんでいない。まるで人形のような硬質さにぎよつとした。

「交換しなくても大丈夫だよ。気を遣わせてごめんね」

びくつと大袈裟おおげさに固かたまってしまった私に気づいた相良さんは、すぐに手を離して謝る。

「……いえ」

びくくりした……！

突然掴まれたことにも驚いたが、それよりも相良さんの指がひどく冷たかったことにびくくりした。確かに今日は寒いけれど……冷え性なのかな？ それともファンヒーターの設定温度が低すぎた？

それに少し……怖おそかったような……端正な顔立ちだから余計にそう思えたのかもしれない。

「……」

立つたままなのもおかしいので自分の椅子に座り直すものの、なんだか落ち着かない。手に彼の手の冷たさが伝ってきた気がして、テーブルの下で温めるように擦る。

相良さんはコーヒーに口をつけ、「美味い」と言ってくれた。

「真希ちゃんは、仕事は何をしてるの？」

「アパレルのショップで働いています。あ、ちょっと待ってくださいね」

慌てて私も鞆の中にある名刺ケースを探り、ショップの名刺を差し出す。

受け取った名刺を見た相良さんは、感心したみたいに呟いた。

「その若さで副店長なんて凄いね」

「いえ、アパレルショップですし、スタッフの人数も少ないですから」

謙遜ではない。お店のお客さんの年齢層にもよるけれど、アパレルショップでは二十代の店長だって珍しくないのだ。副店長ならなおさらそうだし、中には十代の店長、副店長という猛者まで存在する。

「むしろ相良さんの方が凄いですよ。常務だなんて」

「友人と立ち上げた会社なんだよ。人がいなくて役職を割り当てられただけだから」

創業メンバーか！ さらに凄いな……！

もう溜息しか出てこない。私と三つ、四つしか年齢は変わらない感じなのになあ。

こんなにスペックの違いを見せつけられると、年収はいくらなのかなーなんて下世話なことまで考えてしまう。ちなみにアパレルは昔はともかく、今やファストファッションに圧されて、薄利多

売の氷河期なので、お察しください……

相良さんは一旦カップをソーサーに戻す。それから透き通るような瞳を私に向けて——意外な言葉を口にした。

「真希ちゃん。乃恵さんがいないなら、君に恩返しをさせてもらえないかな？」

「はい？」

驚いて反射的に返事をしたものの、数拍置いて思いきり首を傾げる。

え、なに？ 今なんて？

戸惑う私に、相良さんは綺麗に笑ってみせる。今日一番の眩しさに気圧され、若干引いてしまった。

「自己満足だと自分でも分かっているんだけど、どうしても気持ちが収まらなくて……だから乃恵さんの娘である君に恩返しをさせてもらえないかな？」

『恩返し』——なるほど、そう言ったらしい。

随分真面目な人だ。……うん。鶴も真つ青の義理堅さ！

ようやく頭が理解し始めた。

でも恩返しとか……いや、ナイナイ。今、何時代って話だから！

相良さんがさっき説明してくれた話から察するに、多感な子供時代にお世話をした母に恩を感じているのだろう。とはいえ、それが母の仕事だったのだ。母と相良さんがどんな関係を築いたかは知らないけれど、お給料は貰っていたはずだし、それに対して恩返しをしてもらうのはおかしいと

思う。なにより……

「母は母で、私は私ですし……」

お母さん本人にというならともかく、私に返すというのはちよつと理解できない。

「あの、お気持ちだけで十分です。きつと母も、こうして相良さんが仏壇にお線香をあげに来てくれたことを、喜んでいると思いますから」

実際、さつき頂いたお供えの果物すら、あの小さな仏壇には不相応だ。メロンは和紙で包まれていたし、りんごもラ・フランスも見ることがないくらい大きかった。フルーツは好きなので嬉しいけれど、一人で食べきれるかどうか。余ったらご近所さんへ野菜と一緒に裾分けして、お店のスタッフにも持っていこう。

現実逃避気味にそんなことを考えていると、相良さんが困ったようにきゅつと眉間に皺を寄せた。「それじゃ僕の気が済まないんだ。……そうだ。何か必要なものはない？ こう見えてもそれなりに収入はあるから遠慮しないで？」

大丈夫、どう見ても高収入にしか見えないから！ そして、そんないいことを思いついた！ みたいな笑顔で言われても……

いつまでもここにこしている彼は、どうやら冗談のつもりではなく本気らしい。

悪い人ではないと思うんだけどな。なんでも買ってあげるなんて、歴代の彼氏からも聞いたことがない素敵なセリフだ。でも実際に言われると、嬉しくなるよりも先に裏があるんじゃないかと勘ぐってしまう。

「本当に結構ですので」

このままでと平行線になりそうだったので、若干強めの口調でしつかりと断る。

すると相良さんは俯き加減になり、きゅうつと眉尻を下げて物言いたげな瞳を向けてきた。

「……本当に何もない？」

そう言つて、より悲しそうな顔をする。漂い出した悲壮感が半端ないプレッシャーとしてののしかかつてきて、私は言葉に詰まり慌てて首を振つた。

「いや!? あの、そういうことじゃなくてすね!? あ！ じゃあ、お盆とか！ 気が向いた時に

でもここへお線香をあげに来てくれませんか!? きつと母も喜ぶと思います！」

焦つて言葉を重ねていた途中で思いついて、そのまま口にする。
でも苦し紛れにしてはいい考えじゃない？ 本当はお墓参りをしてもらえたらいいんだけど、お墓がある田舎は遠い。その点、この家に一年に一、二回来る程度ならお互い負担にはならないだろう。だからとりあえず、その罪悪感をぐりぐり抉つてくるオーラをしまってください！ 美形つてやだ。どうしてこんなに困り顔に破壊力があるの。まるで私が意地悪をしているような気になる！

「そんなことでもいいの？」

「もちろん！」

間髪を容れずに即答する。

十分です。むしろ過剰です。四畳半の隅つこの小さな仏壇で申し訳ないくらいです！

「お母さん面食いでしたから、相良さんみたいになかつこいい人に一年に一回でもお線香をあげても

らえたら、小躍りして喜ぶと思います！」

うん、私が色々貰うより、絶対その方がいい。

ここは譲らないぞ、と気合を入れて正面から相良さんを見れば、私の勢いに驚いたらしい彼は、ばちばちと目を瞬いた。わあ、長くて濃い睫毛——なんて羨んだ瞬間、何故か相良さんが派手に噴き出す。

「え？」

戸惑う私を前に、彼は口元を押さえて下を向く。だけど肩が震えているから、笑っているのは丸わかりである。

「つく……ごめん。……小躍り、確かに乃恵さんならしそうだよね。それにかっこいいと思ってくれてありがとう。面と向かって言われると照れるけど」

よほどおかしかったのか、相良さんは口元に手を当てたまま顔を上げ、何故か最後にお礼を言った。そこで私はようやく自分の失言に気づく。

……しまった。焦りすぎて心の声までダダ漏れにってしまったらしい。

恥ずかしさに熱くなる顔を逸らす。

というか、相良さんは笑いすぎ！ かっこいいなんて言われ慣れているのだから、そこはスルーするのが紳士じゃないですかね……！

それにしても、俯いてしまったから一瞬しか見えなかったけれど、顔いっぱいでも相良さんはかっこいい。むしろちょっと幼くなつて可愛らしさがプラスされている。いわゆる、きゅんと

してしまう笑顔とでも言うのだろうか。……自分で言っていて恥ずかしいけど、これ以上の確かな表現が見つからない。

でもまあ、すました顔よりはこっちの方がいいな、と思う。

おかげで、今まであった相良さんに対する妙な気後れ……というか、緊張感がなくなっている。

和んだ空気の中で電話番号の交換をして、スマホをテーブルの上に置く。同じタイミングで自分の腕時計を見下ろした相良さんが、すっと立ち上がった。

「お線香だけって言ってお邪魔させてもらったのに、長居しちゃってごめんね」

「あ、いえ。こちらこそお構いできなくてすみませんでした」

定型文みたいなやりとりをして玄関まで見送る。靴を履いてもう一度振り返った彼は、窓から差し込む逆光が眩しかったのか、微かに目を細めて私を見た。

「……？」

「じゃあまた近い内に」

ニッコリと笑みを浮かべて別れの言葉を口にした相良さんに、一瞬違和感を覚える。妙に空いた間も気になるけれど、近い内って？ あれ、もしかしてお盆以外にも来ようとか思ってくれているのかな？

それを確かめる前に扉が閉まり、後にはあの甘い香りが残る。相良さんが階段を下りる音が遠のいていったのを確認してから、私は首を傾げた。だけどころに言葉の綾だろう、と思い直して溜息をつく。

「はー……なんか凄い人と知り合いになっちゃったなあ……」

なんともいえない高揚感と脱力感。やらなきゃいけないことは山ほどあるのに、やる気が出ないイケメン、というか相良さん恐るべし……。部屋に入ってもらった時は、本当に緊張したもんなあ。後半、特に私の失言で笑ってくれてからは、随分マシになったけれど。

もう何もかも面倒になって、お昼ご飯はカップ麺という究極のズボラで済ませる。

そして溜まっていた洋服を洗濯機に突っ込んで、洗い終わるのを待つ間にお母さんの遺品の整理に取りかかった。

お知らせ音が鳴り洗濯物を干してからは、叔父さんが持たせてくれた野菜を小分けにして、ご近所さんにお裾分けへ向かう。人当たりのよかったお母さんのおかげで、今も何かと気にかけてくれる人が多いのでそのお返しだ。喪服のクリーニングは明日、仕事に行く時に持っていこう。

一通り片づけを終えて一息ついた頃には、窓の外は暗くなっていた。取りかかり始めたのが遅かったのもあって、すでに夜の八時だ。もうちょっと余裕があったら、貰った野菜で常備菜を作ろうとか、雑誌の新作をチェックしようとか思っていたのに、そこまで手が回らなかった。まあ、突然の来客もあったことだしね。そう考えたら上出来だろう。

それにしても明日から出勤かと思うと気が重い。

「つかれたあ……」

最後は掃除機をかけて処分する段ボールを玄関まで運び、凝り固まった腰を指で押しつつ、電子レンジでカフェオレを作る。

和室に行つて、ちょっと温めすぎて膜が張ってしまったカフェオレを炬燵の天板に置いた。炬燵布団に足を突っ込み、寝転がって思いきり身体を伸ばす。

ちようど視界に入ってきた豪華な果物籠に、あれもなんとかしなきゃなあ、とぼんやり思う。

あまりにも立派すぎてそのまま飾っているけれど、お裾分けするなら早くバラさなければ。

うとうとしていたらいつの間にか本格的に眠っていたらしい。夜中に目が覚めたものの、あまり寒くないのいいことに、私はそのまま炬燵布団を顔まで引き寄せて眠り直してしまった。

そして案の定――

「身体痛い……」

翌日。今日は一週間ぶりの出勤だというのに、炬燵で眠ってしまったので身体のおちこちが痛い。前日だって夜行バスで仮眠を取っただけだし、ちゃんと眠らなきゃ体力にもお肌にもくる年齢なのに、痛恨のミスである。

「しかも変な夢まで見ちゃったし……」

腫れぼったい臉を擦りながらそう呟く。私の中で昨日訪ねてきた相良さんのことがよほど印象に残っていたのか、夢にまで出てきてしまった。そのせいで眠りが浅くてすつきりしない。

その夢もお母さんと私と相良さんの三人で、お母さんが作ったパンケーキを食べているだけっていうよく分からない内容だった。

でもお母さんが生きていたら実現した光景だったかもしれない。小躍りこそしなかったものの、

満面の笑みを浮かべていた夢の中のお母さんを思い出して、朝からちよつと切なくなってしまった。欠伸をしながらシャワーを浴びて、髪を巻いて緩くまとめる。社割で買った春物のワンピースを身に着け、クマを隠すために念入りにメイクをすれば出勤準備完了だ。

季節はまだ冬だけど、お店で取り扱っている商品の半分はもう春物だ。店員としてはお店に並んでいるアイテムを身につけないといけないので、寒いけれど仕方がない。コートの上からストールを羽織ってなんとか寒さを誤魔化す。

鏡の前で前髪を弄り、髪の毛のカラーはもうちよつと明るい色がいいな、と流行の色とのバランスを考える。そして茶色のショートブーツに足を突っ込み、いつもより早い時間に家を出た。

電車で揺られて到着したのはお店の最寄り駅。

まだ早いので周囲のお店は閉まっている。それでも灯りが落ちたままのディスプレイのボディや雑貨をチェックしつつ歩く。うちのお店がある通りはレディース中心のアパレルショップが並んでいて、なかなかの激戦区なのである。ライバル店のセール情報や、新商品の入荷被りのチェックは欠かせないのだ。

そんなことをしながらようやくお店の前に到着すると、スタッフの麻衣ちゃんが扉の鍵を開けているところだった。彼女はアルバイトさんだけど、私の次にこのお店に長く勤めている頼れるスタッフなのである。

「麻衣ちゃん、おはよう」

「わっ真希さん！ おはようございます！ そっか、今日から出勤でしたもんね」

驚いた様子で振り返った麻衣ちゃんは、納得したように頷いて「お帰りなさい」と言ってくれた。「ただいま。長いお休みを取ってごめんね。お土産買ってあるからみんなで食べて」

某銘菓の名前を口にすれば、甘党の麻衣ちゃんのはしゃいでお店の中に入っていく。もこもこのショートフアーのアウトターを羽織っているから、まるで子犬みたいだ。可愛いなあ、と年寄りめいたことを思っ目細めてしまう。まあ、この店の女の子の中では私が最年長だし、実際麻衣ちゃんはまだ二十二歳と若くて可愛い子だ。

連れ立って更衣室兼、スタッフルームに向かう途中で、麻衣ちゃんが思い出したように立ち止まり、声を潜めて教えてくれた。

「そういえば最近、店長がずっと出勤してるんですよ。スッゴイ機嫌悪くてピリピリしてるから、新人が怖がって大変です。しばらくオーナーも来なかったし、やりたい放題ですよ」

「あー……そうなんだ。お疲れ様」

また何かあったのかな。そう心の中で呟いて、こつそりと溜息をついた。

アルバイト時代から何かと私を可愛がってくれたこのお店のオーナーは、六十過ぎの素敵なママムだ。

四年前までは売場には出ないものの店長として毎日お店に来ていたので、つき合っても長いし、その人となりもよく知っている。だけど、オーナーは私が専門学校を卒業し、アルバイトから正社員として雇ってもらった年に、店長業を甥である今の店長に譲ったのだ。ついでにアパレルで働いたことのない店長の補佐として、私は副店長という肩書を頂いたのである。あの頃に戻れるのな

らば、微々たる役職手当に釣られて簡単に頷いてしまった自分を、殴ってでも止めたい……

「あーいつもみたいにサボって来なきやいいのに。うわ、噂をすれば」

「ああ、堤さん。やつと来たんだ」

車の鍵を指で回しながらお店に入ってきたのは、噂の店長だった。お店のスタッフにはその傍若無人ぶりから、蛇蝎の如く嫌われている。

それにしても、また車で来たな。お客様用の駐車場だつていうのに。

「おはようございます。長いお休みありがとうございました」

休みの日数を巡って店長と揉めたことを思い出して、溜息をつきたくなる。ちなみに休みを許可してくれたのは、ちようどその時来ていたオーナーで、渋る店長を叱り飛ばしてくれた。

「リフレッシュできてよかったね。店はその間大変だったけど」

溜息混じりのあからさまな嫌味に、隣で麻衣ちゃんが顔を引き攣らせたのが分かった。

もちろん私もむつとしたものの、いちいち反応はしない。溜まりに溜まった有給消化も兼ねていたし、そこまで言われる理由はないのだけど、反論すればするほど面倒くさく絡んでくるのだ。彼への対処方法はたった一つ。受け流す。それ以外はない。

「私の休み中、何かありましたか？」

「……あー、まあ、ここじゃあな。ちよつと店長室に来て」

そう命令されて、私まで感情を顔に出してしまいうようになった。経験上、こんな感じで呼び出しを受けて聞かされるのは愚痴しかない。正直そんな無駄な時間を過ごすなら、バックヤードの在庫

をチェックして、ボディを着せ替えて発注をかけたのに……

「分かりました。コートと荷物を置いたらすぐに伺います」

「早くね」

私の顔も見ずにそれだけ言って、店長は奥の部屋に入っていく。そこはもともと店長室ではなく、問屋さんやメーカーさんとの商談やスタッフ同士のミーティングに使っていた部屋だった。けれどいつの間にか店長がパソコンやらソファを持ち込み、私物化してしまったのだ。

「あー無理！ 腹立つわー。オーナーの甥だからってなんであんなに偉そうなんですかね!？」

扉が閉まつてから麻衣ちゃん鼻息を荒くして憤る。せっかくの可愛い顔が台無しになる形相だ。まあまあとそれを宥めて、今度こそスタッフルームに向かう。

ロッカーに鞆をしまつて、紙袋からお土産のお菓子を取出してテーブルに置く。大きめの付箋に『みんなで食べてください』と書いて蓋にぺたぺたと貼つつけた私は、麻衣ちゃんに小物の在庫チェックをお願いしてから、店長室に足を向けた。

「遅いよ、堤さん」

開口一番そう言われて、溜息をつきたくなる。

謝りはしたけれど、気持ちに伴っていないのが分かったのかもしれない。私を見た店長はソファの背にだらしなく凭れかかり、大袈裟に溜息をついてみせた。そして前に座るように言われる。いつもは立たせたまま話すのに珍しいなと思うと同時に、長くなりそうな予感にげんなりする。

上着脱げばいいのに。せっかくの高いスーツが皺になりますよー。

店長が着ているのはイタリア製の某有名高級スーツである。裏地も見えていないのに何故分かるのかと言うと、本人がスーツはそれしか着ないと口から口にしてしているためだ。

……そういえば相良さんは、高そうなスーツを嫌味なく着こなしていたなあ。

背景をヨーロッパの街並に変えれば、そのまま広告になりそうな完璧さだった。

まあ、アレと比べるのはさすがに可哀想だよな。スーツに着られている感じすらしている店長を観察しながら、心の中でそんな感想を抱いた。

「……ちゃんと聞いてんの？」

「え、あ、はい！」

しまった。ぼうつとしていた。

慌てて返事をした私に、店長は胡乱げな視線を向ける。私がかもう一度謝ると、少しだけ気が収まったのか、芝居がかった動作で肩を竦め、再び口を開いた。

「オーナー代わったから」

「……あー……はい、……え!?」

自動的に相槌を打つだけのマシンになりかけていた私は、だるそうに放り投げられた言葉をキヤッチし損ねた。慌てて拾い上げた内容に驚いて店長の顔を見れば、丁寧かつ嫌味っぽく、同じ言葉を繰り返される。

「オー・ナー・代・わつ・た・か・ら」

……オーナーが代わった？ 嘘。

反芻して言葉を失う。

「どうしてですか!？」

「売ったんだよ。叔母さんが。この建物と店の権利書を」

思わず腰を浮かせて叫んでしまった私に、ようやく満足したらしい。店長は唇を歪めて鼻を鳴らし、組んでいた足を外した。

「ほんつと勝手だよな。俺が聞いたのも三日前！ なんで急に、つて聞いても奥歯にものが挟まったような言い方はわかりでさあ。突っ込んだら身体の調子が悪いつて部屋に籠って、それっきり」

「でも！ そんな急に決まることじゃないですよ？ お店の権利を譲る手続きとか、色々時間がかかるんじゃないんですか？」

「だからそういうの全部聞いても、ちゃんと答ええないんだつて。逆に堤さんさあ、なんか理由聞いてないの？ 叔母さんと仲よしじゃん」

きつと長期休みの件で庇つてもらったことを当て擦っているのだろう。ぐつと言葉に詰まる。

「……いえ、何も聞いてません」

「そうなんだ。意外と堤さんも叔母さんに信頼されてなかったんだね」

ぐさつと突き刺さるけれど、店長だって同じ立場なのだ。あらかじめ言ってくれなかったのはやつぱりショックだけど……やむを得ない事情があったんじゃないかな、と思う。

オーナーはそういうことも含めてきつちりしている人だったから。……ただ、その事情が何なのかは想像もできないけれど。

「いつそ騙し取られたとかだったら納得できるけどさあ。なんでこんな大事なこと、店長である俺に相談もしないで決めたのか、ホント理解できないよ」

店長の物騒な言葉にぎよつとしたものの、その可能性もなくもない気がしてくる。

だって、服が大好きなオーナーは、このお店を大事にしていた。なのにお店を手放すなんて、ピンと来ない。オーナーはこの辺りの地主さんでもあるし、お金の困って売り渡したという可能性も低い。

さつき私が言った通り、お店や土地の権利の手続きもあつただろうから、半月前ここで顔を合わせた時には、すでにお店を譲ることは決まっていたはずだ。それなのに私や店長に黙っている理由なんてあるだろうか？

「堤さん、反応薄いよね。なに、もしかして冗談だと思ってるの？ 別にそれならそれでいいけどさ、堤さんが恥を掻くだけだし。ああ、でも今日のお昼にその新しいオーナーが挨拶に来るから、今日休みの子達も含めてスタッフ集めとして」

騙されたかどうかは分からないけれど、オーナーが代わつたのは確からしい。さすがにスタッフ全員を巻き込んで冗談でした、なんてことは許されない。

「てつきり俺に譲ってくれるもんだと思つてたから、今まで我慢してたのに」

本格的に愚痴り出した店長の話は、右から左へと流しつつ考える。オーナーに直接電話してみようかな。でも店長が言った通り、代わることも言ってもらえなかったのだから、迷惑に思われるかもしれない……、それならそれでお詫びをするとして、今までお世話になつたお礼だけでも言つて

おきたい。

「オーナーは、今どうされているんですか？」

「あー今日から友達の家があるヨーロッパに旅行だつて。こんなに引つ掻き回して優雅なもんだろ？ ホントもうボケちゃつてんじゃないかな。よつぽど楽しいのか、何度も電話してるけど全然繋がらない」

あまりの言いようにむつとしたものの、一つ深呼吸して心を落ち着かせる。

海外に行つても使える携帯はあるだろうけど、オーナーがそれを持っているとは限らない。

とりあえず電話してみても……ああ、もう。納骨も終わつてようやく色々落ち着いてほつとしたところだったのに、まさか休んでいる間にオーナーが代わるなんて思いもしなかった。

でもどれだけ動揺していても副店長である以上、私は少なからず困惑するに違いないスタッフのフオーをしなければならぬ。オーナーが代わることは、スタッフの削減なんかもあるのだろうか。赤字ではないけれど、ただでさえここ数年の売り上げは伸び悩んでいるし……嫌だな。みんないい子なのに。

というか、一番お給料が高いであろう店長や、そこそこ貰っている副店長の私のクビの方が危ないかも。

うわ、ここに来てまさかの職を失う展開!? 一人暮らしに突然の失職は死活問題だ。

「あの、新しいオーナーってどんな人なんですか」

私の質問を今更と感じたのか、店長は鼻白み、「さあ？」と軽く肩を竦めた。

「俺もこの前電話で話したただけだから顔は知らないけど、声は若かったな。名前は——なんだっけ。スマホに登録しておいたと思う」

そう言つて足を組み直し、隣に置いていた鞆を探り始める。

……呑気だなあ。身内がお店を騙し取られたとは思えない態度だし、騙された云々はやつぱり店長の勘違い？ そもそも店長は自分の進退にも関わるって分かっているのかな？ 今まではオーナーの甥だからって許されていたことが通らなくなるってことなのに。

あれ、そう考えるとそこまで悪い展開じゃない……？ って違う！ お世話になったオーナーが辞めてしまったことを喜ぶとか、なんて恩知らずなんだろう！

オーナーごめんさい、と心の中で謝罪したところで、ようやく店長が鞆からスマホを取り出した。画面をタップしていた彼がぴたっと指を止める。そして思い出したように「そうそう」と頷いた。

「相良。相良大貴」

相良……

そう反芻して——私は耳を疑った。

「初めまして。相良大貴です。アパレルは本当に素人なので、教えていただくことも多いと思います。すが、よろしくお願ひします」

わあっと女の子達の黄色い声上がる。お昼近く、突然の呼びかけだった上に時給は発生しない

にもかかわらず、ほぼ全員が集まってくれたので、お店の中は賑やかだ。お客さんがちよいどいなくてよかった。

相良さんの隣に並んでいる店長は、超仏頂面である。

まあ若い女の子はイケメンが大好物ですからね……

昨日見た時と寸分変わらない、眩しいくらいの相良さんの美貌に溜息が出てくる。

店長から名前を聞いたものの、同姓同名の別人という可能性もあったので、実際に顔を合わせるまでは信じ難かった。だけど約束の時間に現れた新オーナーは、間違いなく昨日、我が家を訪ねてきた『相良大貴』その人だったのである。

「堤さんもよろしくお願ひします」

「よ、……よろしくおねがいします」

動揺が思いきり声に出してしまった。詰まって抑揚がおかしくなった挨拶に、麻衣ちゃんがふっと噴き出す。

「真希さん、緊張すぎですよ。まあイケメンなんて、この辺じゃ見ないですもんね！」

「あ、ははっ、つい」

悪気のない麻衣ちゃんに乗って笑ってみせたものの、未だ事態を処理しきれない。

そして麻衣ちゃん、自分はイケメンだと思っている店長をさりげなくデイスるのはやめよう？

ほら、ますます顔が強張っちゃってるからさ！

でも本当に相良さんがオーナーなの？ 偶然？ いやまさかそんなのありえる？

さつきも思ったけれど、お店と建物の権利者の変更なんて、昨日の今日でできるものじゃない。偶然だったとしても、じゃあどうして昨日お線香をあげに来てくれた時に言ってくれなかったのか疑問が残る。店名が入った名刺を渡したのだから、気づかない方がおかしいだろう。

……今すぐ問い詰めたけれど、ここで話せば集まっているスタツフにも聞かれてしまう。店長の口ぶりからして、新オーナーと知り合いだと知られたら、物凄く因縁をつけられそう。

それにさつきの女の子達の反応から考えるに『仲を取りもってください！』なんて頼まれて、ややこしいことになりそう。そして恐らく、さつき挨拶した感じでは相良さんも私と初対面の体でいく気なのだろう。

「現場は堤に任せているので、何か質問があれば彼女に聞いてください。堤さん、オーナーを案内してあげて」

挨拶もそこそこにそう言った店長は、そそくさと自分の巣、もとい店長室へ戻っていった。

その背中を見送った相良さんはちよつと困ったように笑う。

彼の笑顔に、側にいたスタツフの女の子が、きゅんっとした顔になったのが分かった。罪作りな相良さんにまた溜息をつきたくなる。この人が来る度に、女の子がソワソワして仕事にならなうだ。

「……どこから案内しましょうか」

スタツフの手前、動揺は隠して平坦な声で尋ねる。

相良さんも「仕事の邪魔をすまません」と前置き、すぐに本題へ入った。お互い昨日と違っ

て終始敬語で、間合いも仕事相手らしいものだ。

どこか白々しさを抱えつつ、私は言われるまま各売場を案内していく。

「二階もあるんですね？」

一階の案内を一通り終えたところで、相良さんは視線を上げてすぐ側の階段を指さした。

大きな螺旋階段の半分まではトルソーを置いて、ディスプレイとして使っているけれど、その先はスタツフオンリーのプレートとチェーンをかけて立ち入り禁止にしている。

「昔は二階も売り場として使っていたんですが、売り上げが下がったので縮小しようと閉鎖したんです。今はほぼ倉庫になっています」

様子をおかがいながらそう説明する。やっぱり相良さんが、昨日のことについて触れる気配はない。ああもう！ 気になりますけど！

「そうなんですか。見ても構いませんか？」

「はい、定期的に掃除はしていますし大丈夫です」

表面上は淡々と返して、キャッシュヤーの後ろにある二階のブレイカーに手を伸ばす。だけど手前に積んでいる荷物のせいで、微妙に届かず踵を浮かしかけたその時、後ろから大きな手が伸びてきた。

「これですか？」

背中に覆い被さってくる微かな重さを感じてから一拍後、昨日も嗅いだあの爽やかだけど、どこか甘い香りに包まれる。

「……っ！」

背後の存在にぎよっとして、飛び上がりそうになるのを必死に堪えた。

かろうじて首だけ上下に動かして返事をする、相良さんがブレーカーのスイッチを押し上げてくれる。

「じゃあ行きましょう」

「あ、ありがとうございます……」

すっと身体を離して階段に向かう背中を慌てて追うものの、未だ心臓がうるさい。

……びっくりした。いや、うん……ときめいたとかじゃなくてね！ あんなに男の人とくっついたのなんて久しぶりだったから、ちよつとびっくりしてしまった。

まあ、これまでだつて満員電車で似たような状況はあつたけれど、それと一緒にするのは違うだろう。

……いやいや、だからそんな場合じゃないつてば！ と、相変わらずドキドキしている胸をぎゅつと押さえ、自分を叱咤しチェーンを外す。そのまま先に階段を上がつて照明のスイッチを入れた。

壁に寄せた棚と、壊れたハンガーラック、季節限定のショップ袋の段ボールを置いていただけなので、全体的にがらんとしていてどこか徴くさい。

「下と同じ間取りなんですな」

相良さんはくるりと部屋を見回して、納得した様子で頷いた。

「もつたいないですね。この辺りは賃料が高いせいか小規模のお店が多い中で、こんなにスペースがあるのに。扱っているブランドにはベーシックなデザインも多いですし、品揃えを多くした方が客足も伸びるんじゃないかと思うんですけど、どうですか？」

「え？ あ——そうですね……」

さっきの衝撃から抜け切れず返事が遅れた。慌てて仕事モードに頭を戻して、言われた内容を考える。

一店員としては、商品が増えるのは単純に嬉しい。せっかく来店してくださったお客さんを品切れでがっかりさせたくないし、現状ではカラー展開の多い商品が出たとしても、定番色しか発注できないことも多いからだ。ただ副店長としては売れ残りリスクを無視できない。

正直にそう言えば、相良さんは少し考えるみたいに形のよい唇に拳を当てた。

「在庫を抱えるのが不安なら、半分賃貸にして、軽いスナックが食べられるようなカフェに入ってもらってもいいかもしれませんね。滞在時間も延びるだろうし、配置を考えれば、ここから商品も見える造りにできるでしょう」

それはきつと店の子も喜ぶ。この辺には手頃にコーヒーが飲める場所がないって言っていたし。

それにしてもカフェか。ここ最近ショッピングモールに、カフェが併設されたアパレルショップも増えてきたよね。……うん、悪くない。

「いいですね！ でも、できればカフェはうちから出した方がよくありませんか？ ユニフォームはなしでソムリエエプロンだけにして、うちの商品を着て接客してもらった方が宣伝になるだろう

うし」

「確かにその方が、シヨップの雰囲気は伝わるからいいですね」

頷きながら、カフェのスタッフを引き受けてくれそうな子を頭の中でピックアップしていた途中で、はっと気づいた。

今、二人つきりだ……！

「あ、あの」

「椅子やテーブルの備品は心当たりがあるから任せてくれますか？ ああ、一応店長にも話を通しておきますね」

「え、ああ……、そ、そうですね……」

きつ……聞けない。そうよね、だって仕事だし。

「真希さん！ すみません、お電話です！」

不意に下から呼びかけられて慌てて返事をする、相良さんが腕時計を見た。

「私も一緒に下ります。案内ありがとうございます」

彼はそう言うと、先導するように階段を下りていく。

階段の途中まで来てくれていたスタッフが、ちよつと頬を染めて相良さんに会釈えしやくしてから、私に電話の子機を差し出した。

『お世話になっております。先程発注していただいた分の――』

受話器を耳に当てるものの、自然と視線は相良さんを追いかけて店の奥へ向かう。恐らく店長に

さっきの話をしに行ったのだろう。

教えてもらった欠品商品を頭に叩き込み、代替品を再注文して電話を切る。そして更衣室に駆け込み、ロッカーを開けて鞆を引っ掴んだ。

キャッシュヤーにいたスタッフに聞けば、相良さんはもう店を出たらしい。

「ごめん！ 一番外で取るから何かあったら電話して！」

ちなみに一番とはお昼休憩。二番は夜休憩で三番はトイレだ。

店を出て左右を見回し、この通りでは珍しいスーツの背中を見つけて追いかける。

「相良さん！」

足を止めた相良さんに、私は首にぶら下げていたネームプレートプレートを頭から引き抜きながら詰め寄った。

「どういうことなんですか!? 相良さんが新しいオーナーなんて」

私の勢いに怯ひどんだ様子もなく、彼はゆつくりと身体ごと振り返った後、肩で息をする私を見て苦笑した。

「ごめんね。驚かせちゃって」

そりゃ驚きますよ！

「お家を訪ねて名刺を貰った時に気がついたんだけど、驚かせようかと思って」

え、そんなノリ？

くすくす笑う相良さんに複雑な気持ちになる。あの時言っておいてくれれば、いくらか心の準備

ができたのに……!

私は胸を押さえて、息を整えてから口を開いた。

「私、オーナーが代わるって全然聞いていなくて」

ちなみに店長室から出た後、すぐにオーナーへ電話をかけてみたものの、呼び出し音もなく留守電に切り替わってしまった。一応『またお電話します』とだけメッセージを入れたけれど、店長の『信頼されていない』っていう言葉が引つかかって、何度もしつこくかけることはできなかった。

「そうなんだ? 以前から話は進んでいただけだね」

相良さんはそう言っって肩を竦めてみせる。どこか白々しく聞こえるのは気のせいだろうか。

「あの……」

中途半端に呼びかけたものの、次の言葉が出ない。悩んで黙り込んでしまった私に、相良さんは穏やかに微笑んだまま言葉を重ねた。

「前から本業のコンサルとマーケティングの総仕上げとして、アパレルをやってみたかったんだ。今この業界は失速しているから、業績を右肩上がりにできたら本業の実績になるし……あの店は帰りに寄れるくらい家に近いしね。ああ、ここからも見える。あそこの十二階だよ」

釣られるように見上げた彼の指の先には、駅直結のマンションがあった。お店のポストにも何度か広告が入っていたから知っている。確か完成したばかりで、一番狭い部屋でも億に近かったはずだ。分かってはいたけれど、やはり本物のお金持ちなのだと思っ。

「立地的にも、規模や環境条件的にも、ちょうどいい物件だったんだ」

相良さんは全く自慢することもなく、目を細めてそう続ける。

「……いや、うん。マンションの値段はとりあえず置いといて。」

本業の一環としてお店を買い上げたってことなんだよね? そうか、そういう人も服屋のオーナーになるんだ。私はずっとアパレル一本で来たから、知識も視野も狭くて恥ずかしくなった。

「本当に凄いな偶然だね。僕もあんまりびびくりしたから、どうせならサブプライズにしようと思っただけけど、オーナーが代わることを知らなかったなら、悪いことしちゃったね」

「いえ……」

言われなかったのは、こっちの事情だし……

オーナーのことを思い出して少し暗い気持ちになったその時、相良さんが何か思いついたように声を上げた。

「もしかすると乃恵さんが引き合わせてくれたのかな」

「え? あ、そう、かもしれませぬ……?」

不意に出てきたお母さんの名前に一瞬驚いたものの、そもそもこの人との出会いのきっかけは、お母さんだった。

「それとも、いつそ運命にしてみる?」

「……ん?」

軽い口調で言われた内容を反芻して、私は眉を蹙めた。

何か含みがありそうな視線。つ、と一歩近づいて顔を覗き込んできた相良さんは、ふふつと声を

立てて楽しそうに笑う。その綺麗な笑顔に、何故か肌がゾクリと粟あわ立たった。

「黙り込まれると悲しいな。僕はそうだったらいと思ってるのに」

距離を詰められ、明らかに甘い声音で囁ささやかれて、目を瞬しばたく。

——ちよ、突然何を言い出すんだこの人！

運命なんて甘い言葉が自分に向けられたものだとは思えなくて、一瞬思考が停止してしまった。

しかも、ここ真つ昼間の道のど真ん中！

相良さんの淡い色の瞳に、驚いた私の顔が映っている。それが分かるくらいに距離が近い。

そんな二人の間に、シンプルな携帯の呼出音が響いた。メールだったのだろうか、相良さんは靴から取り出したスマホの画面を一瞬だけ確認して、ポケットにしまい込んだ。

「じゃあまた明日。しばらくは毎日顔を出すつもりだから、よろしくね」

さつきとは違う、万人受けする爽さわやかな微笑みでそう言い残し、踵かかとを返す。

「あ、ちよと……！」

相良さんはあつと言う間に人混みの中へ消えていき、私は完全に置いていかれてしまった。しばらくその場で立ち尽くしていた私は、後ろから歩いてきた人にぶつかって舌打ちされる。

「す、すみません」

ふらふらと道の端つこに移動した後、店から一番近いコンビニに寄り、二階のイトインスペースで味のしないサンドイッチをもそもそと食べる。

その間によく頭を血が巡ってきて、状況を把握できた。

——からかわれた。それはもう盛大に。

「~~~~~っ！」

運命とか、そうだったらいとか！ なんてあんなナチュラルに言葉にできるんだろう。

えっ、口説くせかれてる？ なんて一瞬でも思ってしまった自分が恥はずかしい。あれだけイケメンなら黙もっていても女の子は寄よってくるだろうから、私なんか口説くせく必要なんてないはずだもの。

さつきまで相良さんに見惚みどれていたうちのお店のスタッフにだって、モデルみたいにスタイルのよい子や、可愛い子が揃そろっている。

オーナーのことを黙もっていた件といい、もしかして軽い性格なのかもしれない。もしくは、百歩譲やって過剰なリップサービス……。ある意味、そっちの方がタチが悪い。

相良さんにもイラツとするけれど、それより何よりイイ歳なのにさらっと流せず、小娘のように固かまってしまった自分に腹が立つ！ あー……、三十分前に戻りたい。そうしたら『何言なんってるんですか。お店の若い女の子だったら真面目に受け取うっちゃいますよ？』なんてクールに言い放はつてるのに！

「しかもオーナーについて、ちゃんと聞けなかったし」

誰もいないのいいことに、ぼそりと呟つぶいてカウンターに肘をつき、溜息ため息を漏もらす。

そして手早く昼食を済ませ店に戻ると、店長から命令されて、残のこってくれたスタッフと一緒に二階を片づける。恐らく先程のカフェスペースの話はなしを店長も了承したのだろう。

掃除している間に小耳こみみに挟はんだところによると、今日来たバイトの子達こどもたちにはきちんと時給を支払

うように、と相良さんから店長に指示があつたらしい。

ただでさえイケメンぶりに浮き足立っていた女の子達の彼への評価は天井知らずで、話題は新しいオーナーのことばかりだった。

そして——勤めるお店のオーナーという絶対的な位置に立つ彼に、私はこれからの意味でも悪い意味でも、振り回されることになるのである。

二

「ありがとうございました」

最後のお客さんをお見送りしてから、お店の扉にクローズの札をかける。時間は十九時を過ぎたところで、ビルの合間に見える夜空には、綺麗なお月さまが浮かんでいた。

お給料日前の閑散期だからスタッフの数を減らしたのだけど、別口の来客が多かったせいで今日もなかなか忙しかった。

昨日の言葉通り、今日も相良さんは店に顔を出した。

一緒にやってきたのは、改装工事の業者さんだ。二階に作ることになったカフェスペースのため一緒に来ると、あらかじめお店の方に連絡があつたのである。

なかなか仕事が早い……なんて感心してしまう。急遽^{きんきょ}二階に作ったミーティングスペースで、その業者さん二人と、相良さんと私と店長の五人で打ち合わせをした。

昨日の今日だから、隣に座った相良さんに私はかなり身構えていたけれど、本人はいたって普通の態度だった。最初から最後まで仕事の話で、私にも意見を求め、まとめてそれで終了。

そしてそのまま業者さんと一緒に店を出ていったのである。それはもう、こちらが拍子抜けしてしまうほどあっさりと。

ちなみに、バレンタインが近いからと、スタッフ全員に有名ショコラテイエの限定ショコラを差し入れとして置いていくという心遣いもあった。

……相良さんへの好感度はきつと天井をぶち抜いてしまったのだろう。スタッフのSNSグループでは、新オーナーについてハートつきのコメントが飛び交っていた。ヤバイ。彼女達があの甘いマスクを巡って争い始めないことを祈ろう。

夕方休憩が取れなかつたので、空腹を誤魔化すために私も綺麗なプラリネチョコを一ついただいたのだけれど、凄く美味しかった。ほろ苦くて甘いチョコレートの味を思い出しながら、最低限まで照明を落としてレジの金額を確認していると、奥から店長がやってきた。

「ねえ堤さん、まだ終わんないの?」

「……もう少し待ってください」

あからさまに不機嫌な声で尋ねられて、心の中で溜息をつく。最終確認をして手早くポーチに現金をまとめて、今日の売り上げを店長に預かってもらう。

「お疲れ様でした」の言葉に「遅い」という性悪な返事をした彼を、心の中で舌を出して見送った。基本的に一日の売り上げは、こうして毎日、夜間金庫に持って行ってもらうことになっている。

そして何故ここまで店長の機嫌が悪かったのかというと、打ち合わせの前に相良さんから車でないでくださいね、と注意されたからである。恐らく業者さんが駐車場に車を停めた時に気づいたのだろう。

注意とも言えないくらいいやなりとした口調だったのに、店長は完全な膨れ面だった。まるで叱られた小学生みたいな態度にも呆れつつも、私は心の中で拳を握りしめていた。

よっし！ 私がいくらお客さん用の駐車場を使うなって言っても、聞かなかつたんだよね！

さすがにオーナーに言われたら停めなくなるはず。相良さんがオーナーになってくれてよかったと、初めて実感した。

しかし——案の定というか、その後の店長は打ち合わせ中も終始苛々していて、投げやりだったのだ。それはもう業者さんが苦笑してしまうほどで、これが身内と思うと私も恥ずかしくなってしまった。その分、相良さんが愛想よく穏やかに進行してくれたので、打ち合わせそのものに支障はなかったけれど。最後には予算の範囲内で、大体のイメージを詰めることができてほっとした。

新設するのはカウンターと簡易キッチン。ダクトの問題があるので、工事には一月ほどかかるらしい。営業許可証の取得や食品衛生責任者の講習を受けてもらうスタッフのスケジュールなんかもあるので、ちょうどよかったかもしれない。

ロッカーで着替えて最後にお店の中を点検して回る。今日のバイトのシフトは六時までだったので戸締まりは一人だ。しんと静まり返った店の中は、ちよつと不気味である。
「……早く帰ろつと。今日の晩ご飯は何にしようかな」
わざとらしくくらい大きな声で独り言を呟く。一度怖い、と思ったら普段見慣れたトルソーすら怖くなるのだ。

足早にドアに向かおうとしたところで、鞆の中のスマホが鳴った。ぎくんと跳ねた心臓を落착かせてから、ポケットのスマホを取り出して固まる。

「……げ」
見下ろした画面には相良大貴の名前と、どこかの海のアイコン、メッセージのお知らせ通知が表示されていた。

夕方の打ち合わせついでにメッセージアプリのIDを交換したのである。

どうせ電話番号は知られているし、と諦め半分で教えたことを今更悔やんでも遅い。

『家に戻ってきてから気づいたんだけど、車のキーが落ちてなかった？ 多分二階だと思えます。まだお店にいるなら見てきてもらえないかな？』

「車のキー？」

その内容を最後まで読んで、若干拍子抜けして呟く。

落とし物、か。……びっくりした。

うん、昨日から私はちよつと身構えずさだ。

会議で使ったテーブルの上には特に何も無い。机に手をつけてテーブルの下を覗き込んでみるけ

れど、何も落ちていなかった。

「ないなあ……」

最後に相良さんが座っていたパイプ椅子を引いてみる。すると座面に渋い茶色のレザーのキーケースがあった。

拾い上げて柔らかいレザーをひと撫でして驚く。ブランド名はぼつと見て分からないけれど、物凄く手触りがよい。

キーの刻印は日本の有名自動車メーカー。外国産の左ハンドルが似合いそうな風貌だったから、意外に感じた。

「ただ相良さんつてば、見かけによらずおつちよこちよいだ。車のキーを落とすなんて、仕事に響かなかつたのだからか。」

「ありましたよ、つと」

「ちよつと迷って一言だけ送る。」

すると、またスマホが鳴った。

『悪いんだけど、取りに行きたいから待つてくれないかな?』

「えー……」

読むなり思わずぼやいてしまう。

夕方休憩をチヨコ一個で済ませてしまった私のお腹は、もう限界である。

何分くらい待たなきゃいけないのかな、と、スマホの右上に表示された時間を見て、すぐに思い

ついた。

駅前のあのマンションなら、ここで待つより私が持つていった方が早いんじゃないかな? どう

せ駅までの通り道だし、玄関先で渡してさつさと帰ればいい。それに相手はオーナーである。下手に逆らつてクビにされたら困る……つていうのは言いすぎだけど、最低限の心証は守っておきたい。

『持つていきましようか?』

そう伝えると相良さんは迷つたのか、少し時間を置いて『いいの?』と返してきた。

『どうせ通り道ですから』つと

そう送信すれば、今度はすぐにマンション名と部屋番号が返ってくる。

私は車のキーをポケットにしまい込むと、電気を消してから階段を下り、お店を出て駅に向かった。

いつもの癖で他のお店でショーウィンドウをチェックしながら歩けば、あつという間に相良さんが住むマンションに到着した。

目の前にどおんとそびえ立つ伏魔殿……いやいや高級マンション。そんなに階数はないけれど、

外壁やデザインが豪華だ。

乳白色の大理石が敷かれたエントランスに入り、部屋番号を入力して呼び出しボタンを押す。すぐにスピーカーから相良さんの声で返事があり、名乗る前に濃い木目の自動扉が開いた。

戸惑っている私へ『どうぞ』と言つた後、通話が切れる。

……これは持つてこいと?